



ハヤカワ文庫 <JA 50>

幻覚の地平線

日中光二

著者略歴 昭和16年生，早稲田大
学英文科卒 作家 主著書「わが
赴くは青き大地」「大滅亡（ダイ・
オフ）」他多数あり

JA=Japanese Author

幻覚の地平線

〈JA 50〉

昭和五十年三月十日 印刷
昭和五十年三月十五日 発行

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者 田 中 光 二

発 行 者 早 川 清

印 刷 者 東 儀 俊 邦

発 行 所 株式 会社 早 川 書 房

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一〜八
振替番号 東京・四七七九番

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

ハヤカワ文庫JA

〈J A50〉

幻覚の地平線

田 中 光 二



目次

幻覚の地平線……………二

閉ざされた水平線……………一二

解説へ伊藤典夫……………二七五

カバール・深沢幸雄

幻覚の地平線

幻覚の地平線

1

ニピゴンの検問所^{ゲイト}で捕まった。

それまでは、今までの手順のとおりに旨くことが運んでいたのだ。

GEMを検問所のカープールに突っ込んでドアをロックし、レンタルホース営業所で、アラブの牡の三歳馬を借り——むろん、こいつの知能指数^{I.Q.}は人間の十歳児なみに高めてある——それまでのプラスチックのコンビネーションスーツを脱ぎすて、「森の人間^{フォレスト・マン}」用のモカシン靴^{ブーツ}とバックスキンの服に身をかためた俺は、護身用の麻痺銃^{パラライザー}一式と、スリーピングバッグや簡単な野外生活用品をつめこんだでっかい鞍^{サドル}・袋^{バッグ}を馬に背負わせて、手綱を引きながらゲートへはいつて行った。むろんそのお荷物のなかには、歯みがきチューブのなかに押し込んだLSD-25が、いちばん奥に鎮座ましましている。

なぜこんな申し訳でいどの偽装かといえは、それほど真剣に連中の目をくらます必要がないからだ。つまり検問所の係官との間にはとくに話し合いがついており、まったくの馴れ合い芝居

に過ぎなかったからだ。

その建物は、ちょっと見には古代エジプトの城門に似ていた。正面には矩形にくりぬかれたトンネルが見える。今はそれは鉄のシャッターを閉じている。このトンネルの奥には、一連の科学技術の洗礼がまちかまえている。電子透視装置、イオン消毒装置、その必要があるときにはレーザーガンまで浴せられかねない。

俺はシャッターの右脇に口をあけた端末器にIDカードをさしこんだ。ブーンと言うエレクトロニクスのかすかな唸り……壁の奥で、コンピュータが俺を走査しているいまましい音だ。だしぬけに、音もなくシャッターがひらいた。俺はふりむいて、馬——たしか名前は「シェナンドア」と言った、例によってインディアンふうの名だ——にウインクしてみせてから、中へふみこんだ。

消毒区間で、俺は高周波消毒を受けるためにすっぱだかになり、シェナンドアも鞍を外され、その間鞍サドル・バック袋や服はマニュアル・チェックを受けるために動力ベルトに乗って別室へ消えて行ったが、俺はべつに気にはしていなかった。ルーティン、いつものルーティンだ。

お次のコースで薬液シャワーをあびて、身も心も清められたような殊勝な気持になり、最終区間で一時の別れとなっていた服や荷物にめぐり会って、俺は口笛を吹きながらそれらを身につけていったが、最後に鞍袋のなかをのぞいてみて青くなった。歯みがきチューブが消えている。今までなかったことだ。

チューブの奥には、カプセルに包んだ顆粒状のLSD-25が5グラムほどはいつていた。こい

つはちょっとした量だ。境界のむこうの連中すべてに行き渡るといふ程ではないが。

どだい、俺には昔から閉所恐怖症の気味が少々あった。地下高速軌道にもぐりこむのですから、余り良い気持じゃない。ちょうどその高速モノレールの車室くらいの広さしかない、金属の壁にいま俺は閉じこめられ、しかも、物事がどこかで食いちがいはじめたのを知って、掌がじっとりと汗をかきだした。

だしぬけに、右の側面の壁の下部がするすると動き、それが退きおわったとき、そのあとに三人の男が立っていた。

中央に立っているのは見知らぬ男だが、両端の制服すがたの男たちは、顔馴染みのお役人さんがただ。

「やあ、ロス。驚かせて済まないな」

右端のジョーが言った。俺の賄賂をいつもクールに受けとっていた奴だ。左がわの奴の相棒のジムだって同じようなものだ。

「お前さんに会いたがっている人がいるんだよ。紹介しよう。C・I・U・Sのコワルスキー特務捜査官だ」

古風な灰色のスーツを着た、まんなかの大男が、これまた古風な中折れのひさしに、一寸手をやって傾けて見せた。

ふた昔も前にウォールストリートを歩いていた連中の亡霊のような感じ……。尤もビジネスマンにしては奴の目付はつめた過ぎるし、唇のかたちは意志的すぎると、一瞬俺は思った。C・I

・U・S……かつてのCIAやDIA、NSAなどが包含されて巨大な情報機関となった「米国情報共同体」が、一体俺に何の用なのか。いずれにせよ、世間話をたのしむためではあるまい。

「^{トレーダー}交易屋のロスだね。君にどうしても会わねばならぬ事態がおきてね。時間を貰えとありがたいんだが」

「嫌とは言えないようすな、どうやら」

俺は奴の手が、鞍袋に突っ込まれ、例のチューブを引っ張り出す様子を意識の裏側で再現しながら答えた。俺もかなり甘いな——ジョーとジムの顎に、ヘビー級のボクサーですら問題じゃないパンチを浴せるさまを想像しながら俺はじぶんを嘲った。

なぜ信じたんだろう、役人などを。

「乗りものを待たせてある。今日はそう悪い飛行日和でもないよ、ロス君」

眼下には、オンタリオ湖が秋の陽をあびて巨大な一枚鏡のようにきらめきながら広がっていた。行き交う大小のホヴァクラフトが、そのうえに点々と汚点^{しみ}をおとしている。

あいまいなひとつの黒い汚点が、凄いスピードで俺の視点と平行に水面を移動している。むろんこいつは、俺が乗せられているVTOLのおとす影だ。

俺が何を訊いても、「ゆくさきはネオシカゴ」と一言洩らしただけで、コワルスキーの口の堅さは人間なみではなかった。

幸い俺には高所恐怖症の気はなかったので、公用の高速VTOLのハードな乗心地をどちらか

という楽しみながら眼下の景色にうつつを抜かしていたと言うわけだ。むろんこいつは言葉のあやで、C・I・U・Sと俺が相性が良い筈はなく、内心の不安を視神経の刺激でごまかしていたと言った方が正しいだろう。

そして俺の未来、それも手近かな未来には余り期待はかけられそうもないので、俺の想念は自然に過去にさかのぼって行った。

——コワルスキーは俺を「^{トレイダー}交易屋のロス」と呼んだ。まさにそれに違いはない。今は一九九五年で、「交易屋」という言葉のイメージは、はるか昔にアフリカが暗黒大陸だった頃のアラビア商人や、西部開拓期のレザーストッキングマンを想い起させるのだが、しかも決してそれは誤りではないのだ。

境界の向うにいる連中は、コンゴの食人種とならべることは難しいにしても、ダニエル・ブー
ンがその相手をしていた頃のアメリカ・インディアン達とある意味に於てはそう変りはない。

彼らがあれば見事な政治的手腕を発揮しようとは、俺自身も意外だった。尤も一九七八年の大規模なカリフォルニア騒乱で双方が払った代償が、無言の圧力を加えていたことは勿論だ。

そこでアメリカおよびヨーロッパ共同体と、いわゆる「^{ドラッグ・コンミネーション}幻覚共同体」の間で高度な政治折衝がいくどか持たれ、一九八〇年五月、見事に彼らは解放区をいくつか獲得したのだ。

それは、カナダのオンタリオ地方、メキシコのユカタン地方、フィンランドのスオミ地方、ボ
リネシアのボラボラ島など数カ所に及ぶ。彼らはそこを^{サイケデリック}幻覚境と呼んだ。

今では八十万から百万に近いヒッピー……彼ら自身の呼称でいえば「^{フリー・ピープル}自由の民」……たちがそ

ここで暮らしていると云われる。

社会主義諸国の反応は例によって冷やかだった。スオミへ脱出しようとした何万と言うスラブのアウトサイダーたちが捕えられ粛清されたと言ううわさは、一時根づよくひろまったものだ。
 幻覚共和国ドラッグ・コミュニティがつくられた当時、アメリカ国内の無数のイッピー、ヒッピー、アシッドヘッド、ジャンキー、ブラックパンサーの一部など、ありとあらゆる反体制の連中が、かつてのシャイアン族の大移動のようにぞくぞくとオンタリオの国境めざして移動し、森の湖のパノラマの中に吸いこまれていった。

そして一九八五年のこと、彼らの消息はぶつつり途絶えた。いや、正しく言えば途絶えさせられたのだ。何年にもわたって、管理社会の中核をなすすぐれた科学者、技術者たち……むろん芸術にたずさわる人々は言うに及ばず……がひんぴんとドロップアウトしてはカナダの森に消えてゆき、この膨大な人的損失に業を煮やした政府は、この年の春「サイケデリック幻覚境」を完全封鎖した。

天文学的な費用と技術が投入されて、一種の電子的な柵が自由の国のまわりに張りめぐらされた。四六時中レーダービームが越境者を監視し、脳に特殊な知能を植えつけられたドーベルマンのサイボーグ犬が柵に沿って無数に徘徊した。

ある種の人間にとっては何れも障害はのりこえるためにあるので、数こそ激減したが、「ドロップ・アウト亡命」する人々は後を絶たなかった。

自由の民たちはあらゆる文明的手段を拒否して原始の土地に入って行ったが、当初の協定により医療品の不定期な搬入はおこなわれることになっていた。そこで俺たち「フリー・ピープル交易屋」の出番とな

る。つまりこれは一種のビジネスだ。監督庁から許可証をもらい——むらがるライヴァルを蹴おとして、抗生物質を主体とした医療品を馬に積み、森のなかを交易してあるく。見返り物資は、いまや稀少価値がかつてのダイヤほどにもなったイタチやテン、クズリなどの毛皮である。

トランキライザーや睡眠薬などの錠剤は持ち込みを黙認されていた。彼らの一部は、ビル・パーティの刺激を忘れかねていたので、結構良い商売になった。

しかしLSDやDMT、ヘロインについてはいささか問題があった。

カトリック団体や婦人組織の婆さん連が、「かれらのほろびに手をかすな」と叫びつづけ、その声の擽猛さに閉口した政府は、一九八三年、これらの代物の搬入を禁止した。

マリファナについては彼らは全く不自由していなかった。改良種を最初から持ち込み、至るところで自家栽培していたからである。

くどいようだが、ある種の人間は、禁を破ることに無上なたのしみを覚えるものだ。それが実益に結びつくとなれば尚のことである。そこで“運び屋”連中は競ってこのタイプの人間になった。

一年ほどの空白のあと、すでに秋のシーズンも終りに近づいていたので、俺はたっぷりLSDを仕込み、充分根回しをしたあと（と思い込んでいたに過ぎなかったのだが）、森へあと一步というところで、コワルスキー捜査官と不幸なご対面になった訳だ。……

……VTOLのプラスチックの窓の下の光景はがらりと変っていた。湖水のファンタステイックな輝きは消え、天をつかもうとたがいに鎬をけずってそびえ立つ無数のスカイスクレーパー群